

スマホ利用からみる中高生と親世代

— 「スマホする」とは何なのか？ —

主席研究員 宮木 由貴子

<中高生の「スマホ」利用の状況>

今、スマートフォン（以下、スマホ）の普及に伴い、多くの子どもも「スマホする」ことを日常にしつつある。内閣府の「平成27年度青少年のインターネット利用環境実態調査結果」によれば、現在、中学生の45.8%、高校生の93.6%がスマホを所有している。普及率の上昇に伴い、スマホは10代の若者にとって日常生活に不可欠なツールとなってきた。中学生などでも、塾や部活の連絡が電子メールではなくスマホを使ったSNS経由で行われるようになり、スマホがなかったが故に連絡が行き届かなかったといったケースも散見される。もはや子どもからスマホを遠ざけることは、非常に難しい。

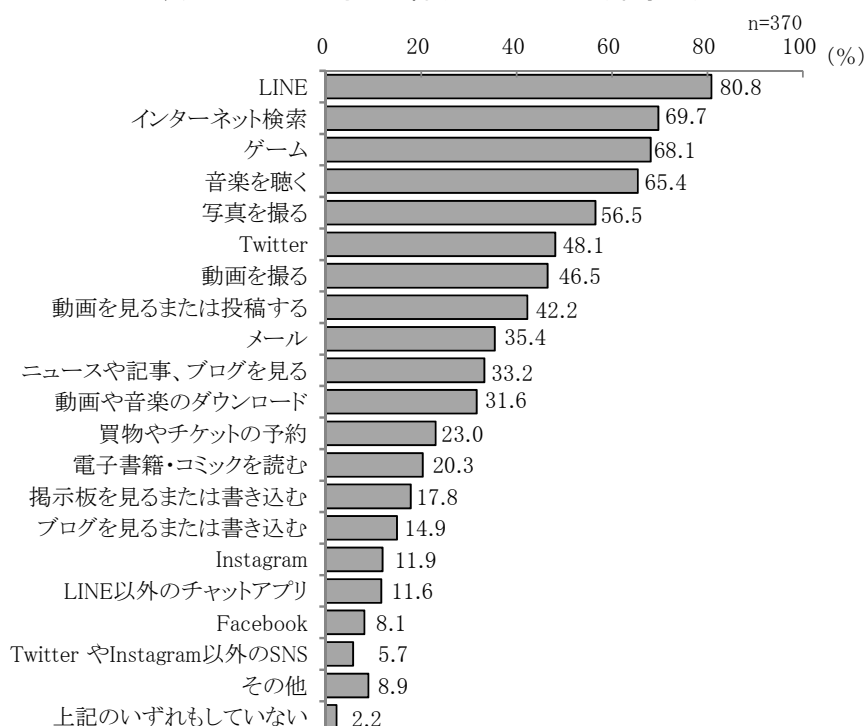
スマホは、「ないと困る」という必需品的機能と、「(なければならぬで代用品はあるものの) があると便利」という利便性向上の機能を兼ね備えている上に、音楽や動画、ゲームなどができ、娯乐的機能や暇つぶしの機能も強い。スマホは、コミュニケーション手段であり、情報収集ツールであり、さらに娯楽の道具なのである。また、電子マネー機能で財布の代わりになったり、アドレス帳や地図、電卓の機能を有していたりと、これまで持ち歩いていたものの多くをスマホに集約できるようにもなった。

さらに、多くのアプリケーションソフト（機能）がインターネットを介して無料で手に入ることもあり、親は子どもが何をしているのか以前に、どのような機能のあるスマホを使っているかすら、把握しにくい状況となっている。

すなわち「スマホする」という表現は、「何をやっているかはわからないが、外見上スマホを使っている」ということに他ならない。

実際にスマホを使って何をしているのかについて中学生のデータを見ると、最上位に「LINE」「インターネット検索」が続き、以下「ゲーム」「音楽を聴く」「写真を撮る」と続いている（図表1）。実際の用途としては、人とのコミュニケーション、情報収集、ゲームや音楽での娯楽といったものが、スマホで行われている主なことのように見える。

図表1 スマートフォンで普段していること(中学生)



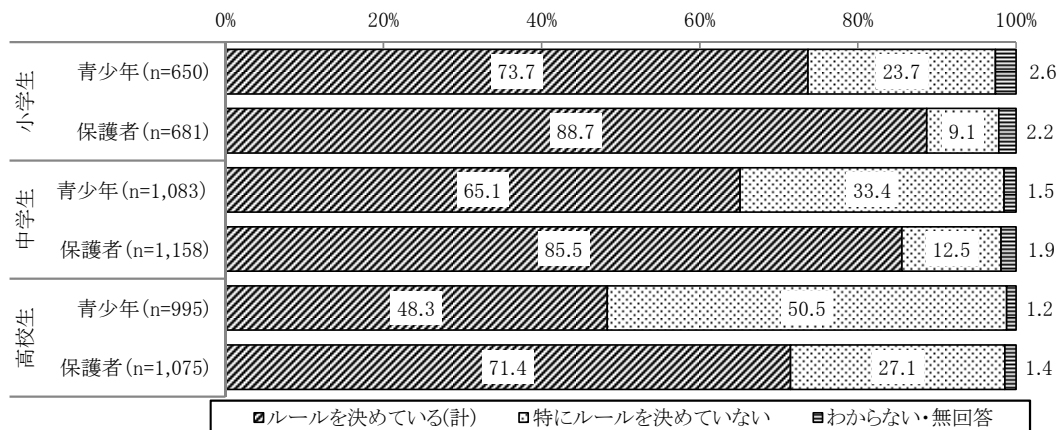
資料：インテルセキュリティ・MMD 研究所「中学生のスマートフォン利用実態調査」2016より作成

<中高生のスマホ利用に対する親の懸念>

このような状況下で、自分の子どもがスマホを長時間利用していることを不安に思う親は少なくない。特に難しい年頃の中高生の子どもには、親の目も行き届きにくくなり、アプリケーションのダウンロードの状況や利用時間を規制するのも難しくなる。その結果、子どもが誰とどのようなやりとりをしているのか、高額な課金のあるゲームに夢中になってはいないだろうか、危険なサイトにアクセスしていないだろうか、目が悪くなりはしないか、歩きながら使用して危ないか、など親の心配は尽きない。

こうした状況により、しばしば親子間でスマホの使用をめぐる思惑にすれ違いが生じることとなる。例えば、インターネットの利用における家庭内でのルール策定についてのデータをみると、「ルールを決めている」と回答する保護者が多いのに対し、子どもたちがそのルールを認めていないケースが多い(図表2)。保護者と子どもの認識のギャップは特に中高校生で大きく、その差は中学生で20.4ポイント、高校生で23.1ポイントに及ぶ。家庭内のルールでコントロールしているつもり親に対し、子どもは親の小言くらいにしか認識していないのかもしれない。

図表2 インターネット利用における家庭のルールの有無(中学生・高校生と保護者)



資料：内閣府「平成27年度青少年のインターネット利用環境実態調査」2016より作成

注：ルールを決めている(計)は、「利用する時間を決めている」「利用する場所を決めている」「メールやメッセージを送る相手を制限している」「利用するサイトやアプリの内容を決めている」「他人を誹謗中傷する書き込みをしないなど、送信・投稿する内容を決めている」「パスワードや電話帳情報、位置情報(GPS)などの利用者情報が漏れないようにしている」「ゲームやアプリの利用料金の上限や課金の利用方法を決めている」「困ったときにはすぐに保護者に相談するように決めている」のいずれかを選んだ人

<親世代は子どもの頃に何をしていたか>

それでは、親世代は自分たちが中高生の頃にはどのようなことをしていたのだろうか。現代の中高生の親世代といえは40代前後から50代くらいが多いと考えられ、自身も積極的にスマホを利用している年代である。親において子どものスマホ利用が気になるのは、親自身が実際にスマホを使ってその依存性を体感しているからという側面もあるだろう。

そもそも、今の40代から50代くらいの世代は、10代の頃にどのようなメディアに接していたのだろうか。主に家族でテレビをリアルタイム視聴することに始まり、カセットデッキやCDプレイヤーでの録音・編集機能の搭載や、ポータブル音楽端末を含む音楽視聴用のメディアの高機能化・小型化・低廉化、さらに家庭の固定電話の子機の普及により、自室で長時間一人で過ごす若者がクローズアップされ、パーソナル化や孤立化が懸念された。

特に、電話の子機の普及は、それまで親などの同居家族が電話を取り次ぐことである程度把握されていた、子どもたちの友人関係が家族に見えにくくなったことが、当時問題視された。加えて、長電話への割り込み通話が可能となり、「他から急用の電話があったときに話中でつながらない」という問題が解決されたことで、子どもの自室での長電話がさらなる親子間での揉め事の原因となった。

また、ビデオの録画やダビングが家でできるようになり、レンタルビデオ店も増加するなど、自分の嗜好に合った映像視聴が自宅や自室で可能となり、テレビだけが自宅での映像視聴ではなくなった。加えて、小型のポータブルゲーム機の普及や、家庭用テレビゲームの出現により、デジタル機器を使ったゲームが爆発的に普及したのもこの時期にあたる。

一方、現在の親も危惧しているようなアダルト情報は、当時紙媒体として流通していた。その後、「ダイヤルQ2」などが問題となったのが1990年代初頭で、現在の40代の多くが10代を終えつつある頃である。

また、現在の40代前半くらいでは、当時まだ数字の組み合わせでやり取りをしていた「ポケベル」で友人とのコミュニケーションを楽しんだという人もいる。後の携帯端末でのメール利用につながる、「非音声でのリアルタイムコミュニケーション」の一般利用の先駆けで、会話に近い形でのやり取りを行うため高頻度で電話を使用することとなり、やはり家での親子間での揉め事につながった。親に咎められるので家では使いづらいということで、公衆電話に女子高生が列を作ったことも話題となった。

<共通点と相違点を活かした親子間コミュニケーションで相互理解を>

こうしてみると、コミュニケーションやゲーム、音楽・動画視聴での娯楽といった、現代の10代がスマホで行っている行動と同様のことを、親世代も当時行っていたといえる。スマホはそれらを1つの機器でできるようにした。

いつの時代も、若者が見たいもの・聴きたいものがあり、親に隠れてでもそれらに接していたいという点では変わっていないのだろう。時の流れで変化したのは若者の価値観や嗜好ではなく、ツールや情報流通などの「仕組み」に過ぎない。

子どもからスマホを取り上げることがもはやできない今日、子どもたちのスマホ利用の中身をコントロールすることは困難である。「うちの子はスマホばかりやっている」と嘆く前に、「うちの子」がスマホで「何をしているのか」を知る姿勢が重要である。「スマホする」という行動自体が否定されるべきものではない。

幼少の頃からスマホと共に育ったデジタルネイティブに対し、親世代は一連のメディア変遷のプロセスを目の当たりにした上でスマホを使っている。現在の40代前後から50代くらいの世代とその親世代における、情報メディアへの接触状況のギャップに比べて、現在の中高生とその親世代のギャップはかなり小さい。したがって、スマホの利用に関する共通点と相違点を話し合うなどのコミュニケーションで、親世代が子世代のよき理解者となれる可能性もあると思われる。スマホを共通の話題として、便利な機能やアプリケーションを教えあったり、ビジネスで使用しているアプリケーションを紹介しながら仕事の話をするなど、「スマホを介した」親子のコミュニケーションであり、「スマホする」ことなのかもしれない。

(研究開発室 みやきゆきこ)